

九州大学所蔵『延五秘抄』一本について(二)

崎村, 弘文
鹿児島大学講師

<https://doi.org/10.15017/16280>

出版情報 : 文献探究. 6, pp. 47-58, 1980-06-08. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

九州大学所蔵『延五秘抄』一本について

崎村私文

本稿は、「文献探究」3・5所載の拙稿に続いて、九州大学文学部所蔵の『延五秘抄』一本（完本）を取り上げ、その國語史資料としての性格を明らかにせんとするものである。

同本は、右記拙稿にも指摘しておいた如く、『古今和歌集』の注釈書として多くのへ読み注記をもち、中世末から近世初期にかけての國語史上の動向にわゆる才段長音の開合・拗長音・四つ仮名等の表記の混乱、濁点・不濁点等の表記の発達、云々を、かなりまとめたかたちで例示し得るものであり、へ決して豊富とは云いがたい。この時期の國內資料を補なう上で、大きな価値を持つものと思われる。

もちろん、それらいくつかの事項に關わる注記も、声点の注記と同様、へ伝受の歴史の中で折々に取り込まれて来たものであることが予想され、取り扱いに細心の注意を要すること、云うまでもない。夥しい注記のうちで、いずれがいつの時期のものであるか、確認することは甚だ困難であるが、『延五秘抄』諸本、^{注2}『古今和歌集古聞』^{注3}『古今和歌集兩度聞書』の諸本を参照することにより、次のように云うことができようである。即ち、

①九州大学所蔵『延五秘抄』一本に見える傍訓・濁点等の注記は、その書写の際、新たに加えられたものが多く、また、それ以外

のものも、表記形態に共通する点が多いことから、原本の形をそのままに写し取ったわけではなく、一種の書き改めが行なわれたものと思われる。

②同本の朱筆の傍訓については、へ伝受のかなり早い段階から受け継がれてきたことが考えられ、墨筆の注記とは別に取り扱うことが適当と認められる。云々。

したがって、ここでは、墨筆の傍訓・濁点・不濁点等の注記を取り上げて考察することとし、その他については、全て別稿にやることとした。考察の順序は、次の通りである。

1. 開合の表記について
2. 拗長音の表記について
3. 合拗音の表記について
4. 八行転呼音の表記について
5. 語頭の [i] (イ・イ)、[je] (エ・エ)、[wo] (ワ・オ) の表記について
6. 四つ仮名の表記について
7. 清濁の注記について
8. その他

1. 開合の表記について

九州大学所蔵『延五秘抄』一本(以下、九大本『秘抄』と略記す)に見える開合表記の実態は、次の通りである。^{注4}

① 漢語の場合

涼 <small>リヤウ</small> 2	諒 <small>リヤウ</small> 1	量 <small>リヤウ</small> 3	令 <small>レイ</small> 1	領 <small>レイ</small> 6	靈 <small>レイ</small> 1
老 <small>ラウ</small> 6	勞 <small>ラウ</small> 5	朗 <small>ラウ</small> 1	藹 <small>ラウ</small> 1	良 <small>リヤウ</small> 3	兩 <small>リヤウ</small> 1
望 <small>バウ</small> 12	石 <small>シヤウ</small> 4	明 <small>メイ</small> 1	羊 <small>ヤウ</small> 1	洋 <small>ヤウ</small> 2	陽 <small>ヤウ</small> 8
兵 <small>ヒヤウ</small> 1	評 <small>ヒヤウ</small> 2	病 <small>ビヤウ</small> 3	平 <small>ペウ</small> 2	并 <small>ペウ</small> 1	孟 <small>マウ</small> 1
諺 <small>ハウ</small> 1	袍 <small>ハウ</small> 2	負 <small>ハウ</small> 1	亡 <small>バウ</small> 5	忙 <small>バウ</small> 2	茫 <small>バウ</small> 2
定 <small>テイ</small> 9	貞 <small>テイ</small> 4	納 <small>ナウ</small> 1	方 <small>ハウ</small> 4	放 <small>ハウ</small> 3	芳 <small>ハウ</small> 1
道 <small>ダウ</small> 6	堂 <small>ダウ</small> 2	納 <small>ナウ</small> 1	賜 <small>チヤウ</small> 1	長 <small>チヤウ</small> 7	當 <small>ダウ</small> 6
靜 <small>ジヤウ</small> 1	雜 <small>ザウ</small> 2	省 <small>セウ</small> 1	窓 <small>ソウ</small> 3	到 <small>タウ</small> 1	唐 <small>タウ</small> 6
情 <small>ジヤウ</small> 2	成 <small>ジヤウ</small> 8	城 <small>ジヤウ</small> 1	常 <small>ジヤウ</small> 4	嘗 <small>ジヤウ</small> 5	聖 <small>セイ</small> 14
性 <small>シヤウ</small> 12	生 <small>シヤウ</small> 6	成 <small>ジヤウ</small> 1	上 <small>ジヤウ</small> 4	堂 <small>ダウ</small> 12	請 <small>ジヤウ</small> 2
尙 <small>シヤウ</small> 1	傷 <small>シヤウ</small> 7	錫 <small>シヤウ</small> 1	詳 <small>シヤウ</small> 2	昌 <small>シヤウ</small> 2	姓 <small>シヤウ</small> 5
青 <small>シヤウ</small> 1	章 <small>シヤウ</small> 2	賞 <small>シヤウ</small> 19	象 <small>シヤウ</small> 2	將 <small>シヤウ</small> 3	商 <small>シヤウ</small> 1
霜 <small>サウ</small> 1	造 <small>サウ</small> 7	莊 <small>サウ</small> 1	相 <small>サウ</small> 4	正 <small>シヤウ</small> 15	声 <small>シヤウ</small> 1
卿 <small>キヤウ</small> 1	廣 <small>クワウ</small> 1	光 <small>クワウ</small> 5	講 <small>コウ</small> 1	想 <small>サウ</small> 1	葬 <small>サウ</small> 2
竟 <small>キヤウ</small> 3	鏡 <small>キヤウ</small> 1	境 <small>キヤウ</small> 10	慶 <small>キヤウ</small> 1	敬 <small>キヤウ</small> 1	形 <small>キヤウ</small> 3
号 <small>カウ</small> 10	强 <small>カウ</small> 1	行 <small>カウ</small> 2	郷 <small>カウ</small> 2	京 <small>キヤウ</small> 1	梗 <small>キヤウ</small> 1
更 <small>カウ</small> 1	衡 <small>カウ</small> 1	阜 <small>カウ</small> 1	向 <small>カウ</small> 1	仰 <small>ガウ</small> 1	剛 <small>ガウ</small> 2
輿 <small>マフ</small> 1	好 <small>カウ</small> 2	考 <small>カウ</small> 1	高 <small>カウ</small> 1	香 <small>カウ</small> 1	幸 <small>カウ</small> 1

。合音(ou系)の表記

王 <small>ワウ</small> 16	橫 <small>ワウ</small> 1	皇 <small>クワウ</small> 1	黃 <small>ワウ</small> 2
應 <small>ヨウ</small> 5	謳 <small>ラウ</small> 1	口 <small>コウ</small> 3	公 <small>コウ</small> 5
後 <small>コウ</small> 1	薨 <small>コウ</small> 1	劫 <small>コウ</small> 6	胸 <small>キョウ</small> 3
宗 <small>ソウ</small> 3	奏 <small>ソウ</small> 2	僧 <small>ソウ</small> 4	增 <small>ゾウ</small> 1
惣 <small>ソウ</small> 4	勝 <small>シヤウ</small> 1	乘 <small>シヤウ</small> 1	證 <small>シヤウ</small> 7
松 <small>ソウ</small> 3	頌 <small>ソウ</small> 7	承 <small>シヤウ</small> 1	登 <small>トウ</small> 1
等 <small>トウ</small> 2	同 <small>トウ</small> 5	動 <small>トウ</small> 12	頭 <small>トウ</small> 3
龍 <small>リウ</small> 2	能 <small>ノウ</small> 3	奉 <small>ホウ</small> 1	烽 <small>ホウ</small> 1
謀 <small>ボウ</small> 1	鳳 <small>ハウ</small> 1	毛 <small>モウ</small> 4	用 <small>ヨウ</small> 1
弄 <small>ロウ</small> 2	龍 <small>リヤウ</small> 1		擁 <small>ヨウ</small> 1
淺 <small>ケン</small> 1	堯 <small>ケウ</small> 1	業 <small>ゲウ</small> 4	峽 <small>カウ</small> 1
教 <small>ケウ</small> 4	小 <small>セウ</small> 1	少 <small>セウ</small> 1	抄 <small>セウ</small> 1
昭 <small>セウ</small> 3	鳥 <small>テウ</small> 1	朝 <small>テウ</small> 1	調 <small>テウ</small> 1
眺 <small>テウ</small> 9	銚 <small>テウ</small> 1	苗 <small>メウ</small> 1	廟 <small>ベウ</small> 1
要 <small>ヤウ</small> 3	妖 <small>ヨウ</small> 1	葉 <small>ヨウ</small> 2	寥 <small>レウ</small> 1
了 <small>リョウ</small> 1			遼 <small>リョウ</small> 1
			寮 <small>リョウ</small> 1

② 和語の場合

全 <small>マン</small> タフシテ	然而 <small>シカフ</small> シテ	逢 <small>アフ</small> アフ	淡 <small>アフ</small> アフ
甘 <small>アマ</small> マン	(貴 <small>タト</small> ぶる)		
。合音の表記			

妹 イエウト₂ (追 オフテ₁) 大直日 オホナホヒ₃

大ヲホキニ₁ 大津 ヲホツ₁ 大荒城 ヲホアラキ₁

大安殿 オウアトノ₁ 王 オホキミ₁ 多ヲ、シ₁ 融 トヲル₁

※「行ヲコナフ」「相逐 アヒヲフ」等の動詞終止形の例について

ては、開音の場合・合音の場合とも、省略した(違例は見当らない)。

右の①②のうち、②の和語の場合については、例数の少ないこともあって、特に注目すべき傾向を見出したことは困難であるが、いま一方の漢語の場合については、その結果を整理して(左表参照)次のように云うことができやうである。

開音の表記			合音(ou系)の表記			合音(eu系)の表記		
422例			173例			79例		
au 表記	ou 表記	eu 表記	au 表記	ou 表記	eu 表記	au 表記	ou 表記	eu 表記
386 (91.5%)	10 (2.4%)	26 (6.2%)	36 (20.8%)	107 (61.8%)	30 (17.3%)	27 (34.2%)	4 (5.1%)	48 (60.8%)

① 開音の表記がきわめて安定しているのに対し、合音の表記は、ou系・eu系のいずれについても四割近くの違例が認められ、かなり混乱した様相を呈している。

② ただし、「混乱」の中にも或る程度の傾向性が認められ、ou系の合音・eu系の合音とも、auに表記される率が高いようである。

云々。

これは、開合の(発音上の)混乱が、開音の合音への同化Vといふかたうで進んだと考えられることからすれば、一見、有り得べきとは逆の現象のように思われ、困惑させられる(音韻の混乱に付随して表記の混乱が生ずるものとすれば、そこには、むしろ、開音表記の混乱と合音表記の安定——さもなくば、天草本『平家物語』に見られる如き、開音表記・合音表記双方の混乱^{法6}——が期待されるのであり、上記の事実は、それと相反するものであること、云うまでもない)。

もちろん、これによって、「合音の開音に対する接近・同化」を説くことは、他の国内資料・国外資料の実態その他に照らして、当らざることも明白であるから、ここでは、次のように考えるのが適当であらうと思われる。即ち、「九大本『秘抄』書写の時期には、既に開合の発音上の区別が大幅に乱れており、表記の上でもauをouに誤る等のことがしばしば行なわれていた」↓「九大本『秘抄』の書写者にはそのことに対する反省が有り、努めてその誤りを避けようとしたものの、いずれをいずれに表記すべきか明確に判断することができず、結果的に、開合の区別に関わる多くの例をau表記によって処理することとなった(つまりは、彼自身、開合の発音上の区別を明確に持たず、開音を合音に誤ることしばしばであったと思われる)」と。

この見解が果たして妥当なものであるか否か、さらに、他の多くの資料(殊に、九大本『秘抄』と類似の性格を持つ「開書」注釈書類)における実態を参照して判断しなければならぬが、今回はそれ

について触れるいとまが無い。別の機会を得たいと思う。

2. 拗長音の表記について

九大本『秘抄』に見える拗長音表記の実態は、次の通りである。

・juu表記

由ユウ | 融ユウ | タユウ | 木綿ユウ

・iu表記

宮キウ | 窮キウ | 終シウ | 充ゾウ | 從ジウ | 中チウ
注チウ | 注ジウ | 隆リウ

全56例中51例までがiu表記となっている点、注目を要するが、さらにこれと、iu連母音表記の実態とを比較することにより、興味深い事実が明らかになる。

※iu連母音表記の実態

・juu表記

志ユウ | 有ユウ | 幽ユウ | 猶ユウ | 遊ユウ | 優ユウ

舞マユウ

・iu表記

九キウ | 旧キウ | 休キウ | 急キウ | 州シウ | 秀シウ
習シウ | 執シウ | 愁シウ | 集シウ | 就ジウ | 竹ジウ
獸ジウ | 丑キウ | 啣チウ | 晝チウ | 重ジウ | 入ニウ
立リウ | 流リウ

この場合、全86例中51例(60%弱)に本来のiu表記が認められ、教通の上では、拗長音表記よりはるかに安定しているとの如く、さる。

しかし、各表記例の性格を具さに検討してみると、一見、別の音韻を表記すると思えたiu・juuの表記形が、実は、同一の音韻juuを表記するものであり、その内実において拗長音表記と全く同様の混濁をかかえるものであることが、明らかとなるのである。

具体的に云えば、「友ユウ」の如く、iu表記の期待されるところにiu表記の用いられている例は、音韻変化によって拗長音化したかたちを表記したものと見られるが、^{注7}そのいずれも、juuの直前に子音の立たないもの即ち、むきだしのjuuが表記されなければならぬ。いものiiであり、表記者にjuuの存在が明確に意識されるものであつたらうと思われる。それに對して、iu表記の用いられている例は、^{注8}内実において、やはりjuuを表記するものであつたと思われるが、その直前に子音が立つことにより、表記者にjuuの存在が意識されにくかつたか、^{注9}或るいは、意識されたにしても、書記の中間を省こうとする欲求から、「ユウ」の如き表記形が採用されることはなかつたものと思われるのである(殊に、後者の理由によるところが尤であつたかと思われる。そして、その書記の効率性が、やがて、拗長音の表記をiu連母音のそれに接近させたものと思われる)。——ということになる。

つまるところ、上記のような表記のあり方が認められるのは、九大本『秘抄』の書写された時期、既に、拗長音とiu連母音との間に音韻論的区別の失なわれていた結果であると思われるのである。

なお、このほか、才段長音(合)を直に表記した例(「綾綺殿」)なども認められるが、これについては、かつて迫野孝徳氏が詳しく論じられたことが有るので、省略する。^{注10)}

3. 合拗音の表記について

九大本「秘抄」に見える合拗音表記の実態は、次の通りである(「kwa」以外、認められない)。

- | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|--------|-------|
| 化クワ1 | 花クワ1 | 和クワ4 | 過クワ2 | 火クハ1 | 臥クハ1 |
| 畫クハ1 | 悔クハイ1 | 會クハイ1 | 壞クハイ1 | 懷クハイ6 | 外クハイ4 |
| 光クハウ1 | 廣クハウ1 | 廓クハウ1 | 官クハン7 | 卷クワン1 | |
| 桓クハン2 | 寬クハン1 | 翫クハン1 | 勸クハン1 | 觀クハン20 | 元クハン1 |
| 願クハン1 | | | | | |

※なお、「化ケ2」「元ケン4」。

以上、88例中84例までが「クハ1」の表記であり(次項と関係するものは)、ほとんど単一の表記形に統一されていると云って可い。

4. 八行転呼音の表記について

同じく、八行転呼音表記の事柄は、次の通りである。^{注11)}
 「wa」の表記

- 能アヲハ(ズ)！ 逢アハズ！ 阿多介アハスゲ！ 淡アハ(ズ)！

- 哀アハレ5 怜アハレム 憐アハレ(セ) 争アラソハ(ズ)！
 見アラハサ(セ) 彰アラハル 形アラハレ2 顯アラハレ2 偽イカガ
 云イハク3 曰イハク1 謂イハレ1 露敷イハホ4 承ウケラハ(ズ)！
 器ウツハヒ1 音羽川ヲトハカハ2 終ヲハリ6 訖ヨハシメ1
 柏カシハ1 叶カナハ(ズ)！ 蛙カハツ1 極キハマリ1 如クハフ3
 澤サハ1 昔原スガハラ2 則スナハク3 即スナハク6 常盤ナハ1
 難波津ミハツ1 繩ナハ1 俄ニハカ1 鷄ニハトリ1 杷杷ビハ2
 葺不合フキチハスノ1 交マシハル5 養マシハレテ1 辭ヨハレ2
 童ワラハ1 和ヤワラグル1 妹ワサワイ1

※なお、「泡アハ3」「諺コトハカ1」「腸ハラハター」。
 (i)(ハハ)の表記

- 相アヒ5 逢アヒ4 問アヒター 葵アツヒ1 争ヤジソヒテ1
 失ワシヒ1 思ヲモヒ1 懷ヲモヒ1 甲斐カヒ1 嫌キラヒ6
 遠コト1 境サカヒ4 假令タヒ1 延言イカヒ2 使アヒ1
 問トヒ2 句ニホヒ1 願子カヒ2 拂ハラヒ1 掃ハラヒ1
 迷アヒ3 羨シヒ1 齡ヨハヒ1 相アイ2
 間アヒター 袋鳥ケケニス2 思オモヒ1 嫌キライ1 境サカイ1
 流ヲイ1 終ツイニ1 寄ヨイ1 齡ヨハヒ3 妹アハワイ1
 ※なお、「老ヲヒ2」「愛アヒ1」↓「老ライ1」「愛アイ1」
 「哀マイ4」「榮エイ1」「管エイ1」「詠エイ7」「忍エ
 イ1」「ハイ1」「會クハイ1」「壞クハイ1」「懷クハイ6」
 外クハイ4 「桂クハイ1」「經ケイ1」「話ケイ1」「採クハイ1」

「最サイー」「水スイ5」「垂スイー」「推スイー」「衰スイー」
 「瑞ズイ3」「隨ズイ4」「成セイー」「對タイー」「追ツイー」
 「停テイー」「命メイー」「迷メイー」「惟ユイ2」
 「類ルイ7」。

※また、「宿直トノヒー」↓「位クラギー」「酒井人眞サカキノヒトガ子」。

。【u】の表記

逢アフ10 會坂アサカ 仰アフゲ4 葵アフヒ 争アラソフ1
 歌イトフ1 曰イフ3 言イフ4 謂イフ3 虽イフトモ1
 歌ウツフ1 行ヨコナフ2 逐ラフ1 思オモフ1 勘カンガフ1
 嫌マフフ3 順シタガフ2 違タガフ1 喻タトフル1 給タマフ2
 使ツツフ1 調トノフ1 問トフ1 慣ナラフ1 迷マヨフ1 蝶テフ1
 危アウキ1 妹イモウト2 問トウ1 タユウ1 木綿ウヅ

。【je】(ハwe)の表記

取アヘス1 刺アマサヘ2 古イニシヘ2 家イヘ2 雖イヘドモ3
 上ウヘ3 愁ウレハ4 教ラシヘ2 衰ヲトロヘ2 切カハシヌ
 返カハラヘシ1 歸カハラヘシ4 勘カンガヘテ1 加クハヘ1 答コタヘテ3
 噂サヘズリ1 諷歌ソハウター 妙タヘ1 堪タヘ(テル)1
 傳ツタヘテ1 唱トナヘ2 交マシ(ヘモ)1 前マヘ4 弁ワキマヘ1
 八重ヤエ1

※なお、「越コヘヘシ1」「絶タヘ9」「諸兄モロヘ1」↓「葦芽アシモエ1」。
 ※また、「樹ウヘキ1」「声コヘ6」「末スヘ4」「杖ツヘ1」

「故ユヘ4
 「カユヘニ2」↓「末スエ1」。

。【wo】の表記

債イモトホリ1 巖イハホ3 菴イホ2 大ヲホ(シ)5 王オホキミ1
 大直オホナホヒ1 鳩ニホ1 匂ニホヒ1 巖イハホ1
 多ヲカラ(サ)シ1 質スナフ1 遠トラ(マ)9 徹トラル1 融トラル1
 尚ナラ2 猶ナラ1 直ナラキ6 直子ナライコ3 直禪ナラモト1
 葛直クナナラ1 横ヨコヲ(ク)ウ1
 ※なお、「素葦鳥スサノヲ3」。

以上を整理して示せば、次のようになる。

47例	【je】の表記	57例	【u】の表記	59例	【i】の表記	82例	【wa】の表記
「エ」	「ハ」	「ウ」	「フ」	「イ」	「ヒ」	「ワ」	「ハ」
1	46	7	50	16	43	2	80
(2.1%)	(97.9%)	(12.3%)	(87.7%)	(27.1%)	(72.9%)	(2.4%)	(97.6%)

※参考

31例	ハ行転呼音【je】の表記	6例	ハ行転呼音【i】の表記(但和語)	5例	ハ行転呼音【wa】の表記
「エ」	「ハ」	「イ」	「ヒ」	「ワ」	「ハ」
1	29	2	3	0	5

。 [wo] の表記

44例	
「ホ」	15
「ヲ」	29
	(65.9%) (34.1%)

。 以上のハ行転呼音 [wo] の表記

3例	
「ホ」	0
「ヲ」	3

[wo] の表記以外は、本来の表記法を良く保存しているものの如く思われるが、他方、ハ行転呼音以外の [wa] [i] [u] [je] [wo] の表記に目を向けると、本来の表記法に依らず、ハ行の仮名を用いて大方を処理しようとする傾向が見取れる ([wo] の表記については、その見方が当てはまらないかの如くであるが、それは、聊か問題の有る例¹¹即ち、字音 [wo] の表記例と見なし得るもの¹²を統計に含めたため、むしろ、表記例の処理を再検討すべきものと思われる。字音の表記¹³漢語の表記¹⁴は、和語の表記と性格を異にする点が多いことから、右の統計にはほとんど取り上げていない。

つまるところ、ここでも、仮名遣いの誤りをいさぎよしとしない書写者の意識が、大方の表記を、音韻の同化方向とは逆の向きに向かわせた、と見るのが適当なようである。^{注12}

5. 語頭の [i] (イ・イ)、 [je] (エ・エ)、 [wo] (ヲ・オ) の表記に

ついて
語頭の [i] [je] [wo] 表記の表態は、次の通りである。^{注13}

① 漢語の場合
。 [i] の表記

。 [je] の表記

爲⁸ 位¹⁵ 院¹⁴ 葦³ 威¹ 帷¹ 惟¹
 違¹ 遺¹
 以¹ 己¹ 衣² 夷¹ 異⁴ 意⁴ 因²
 音⁴ 淫² 隱¹ 陰⁴

。 [wo] の表記

廻¹ 淮¹ 衛¹ 穢¹ 會⁷ 壞¹ 怨²
 遠² 惠¹ 円¹
 益¹ 延¹ 衣⁶ 映¹¹ 縁⁹ 艶³
 榮² 營² 詠⁷ 敎¹ 炎¹

② 和語の場合

。 [i] の表記 (遺例無し。左には、主要例のみを掲げる。)

憤¹ 矜¹ 偽⁴ 厭¹ 古²
 云³ 曰³ 謂³ 言⁴ 虽¹
 雖¹ 巖³ 家² 菴² 今¹
 未¹ 妹² (「¹」の例、無し。)

。 [je] の表記

繪³ 畫¹ (上記三語、ひとまず、和語として処理する。)

得¹ 擇¹ 撰¹
 [wo] の表記

※漢語の場合

。 [i] の表記	54例	「イ」 33 (61.1%)	「井」 21 (38.9%)
「イ」	33	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「井」	21	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「イ」	10	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「井」	23	本来の表記に依るもの	違例に当るもの

。 [je] の表記	83例	「エ」 55 (66.3%)	「ヱ」 28 (33.7%)
「エ」	55	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「ヱ」	28	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「エ」	13	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「ヱ」	37	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「エ」	16	本来の表記に依るもの	違例に当るもの

。 [wo] の表記	24例	「ヲ」 23 (95.8%)	「ワ」 1 (4.2%)
「ヲ」	23	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「ワ」	1	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「ヲ」	19	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「ワ」	4	本来の表記に依るもの	違例に当るもの

※和語の場合

。 [i] の表記	40例	「イ」 40 (100%)	「井」 0
「イ」	40	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「井」	0	本来の表記に依るもの	違例に当るもの

。 [je] の表記	8例	「エ」 6 (75%)	「ヱ」 2 (25%)
「エ」	6	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「ヱ」	2	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「エ」	0	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「ヱ」	2	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「エ」	4	本来の表記に依るもの	違例に当るもの

。 [wo] の表記	112例	「ヲ」 104 (92.7%)	「ワ」 8 (7.3%)
「ヲ」	104	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「ワ」	8	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「ヲ」	68	本来の表記に依るもの	違例に当るもの
「ワ」	36	本来の表記に依るもの	違例に当るもの

これを整理して示せば、次のようになる。

- 荒小田アラヲケ 緒ヲケ 富緒川トミノガハ 丘ヲカ
 長ヲサ 治ヲサム 敬ヲシメ 終ヲハリ 訖ヲハヌ
 夫ヲト 居ヲレハ 蛇ヲチ 女ヲチ 女脚花ヲチハシメ
 尾ヲ 水尾ミツノヲ 尾花オ 男ヲコ 男松オマツ
 關雄セキヲ 万雄ヨロツオ (素盞鳥スサノヲ)
 王オホキ 大オホ 老ヲイ 於ヲイ 多ヲシ
 興ヲキ 置ヲ (たる) 送ヲル 行ヲコナ 起ヲル
 興ヲル 押ヲシ 懼ヲソ 落ヲチテ 音ヲト
 音初ヲトハ 衰ヲトヘ 同ヲナシ 各ヲノク 逐ヲテ
 追ヲテ 思ヲモヒ 懐ヲモヒ 趣ヲモチ 及ヲテ
 達ヲヨシ 凡ヲコソ 織ヲル 馬ヲロカ 勝臣カチヤシ
 忠臣カチヤシ

- ① 漢語の場合
- 。「ジ」による表記の期待されるもの
- ニジ 自ジ 字ジ 寺ジ 侍ジ 時ジ 事ジ
 - 慈ジ 辭ジ 日ジ 實ジ 邪ジ 蛇ジ
 - 謝ジ 受ジ 樹ジ 壽ジ 誦ジ 叙ジ
 - 如ジ 序ジ 助ジ 成ジ 常ジ
- ② 四つ仮名の表記について
- いわゆる四つ仮名表記の実態は、次の通りである。

「ヲ」の仮名が好まれることは、前項・ハ行転呼音の表記に關しても認められたところであり、語頭・語中尾の如何を問はずいれはやすかつたことが考えられる。「イ」も、字音表記について見れば、「ヲ」と同様、全般に良く用いられる傾向に有ったものである(前項・ハ行転呼音の表記に關する付記事項参照)。

① [i] の表記については「イ」、[je] の表記については「エ」、[wo] の表記については「ヲ」の仮名が、より多く用いられるようである。

② 右の傾向は、漢語の場合、和語の場合を通じて、大差なく認められる。

情ジヤウ3 從ジウ2 縱ジウ1 就ジウウ 獸ジウ1
 丞ジヨウ1 乘ジヨウ1 執熱ジニク1 辱ジヨウ1 淳ジユン2
 順ジユン1 准ジユン3 人ジン2 仁ジン3 尽ジン1
 皇子ワウジ1 學士ガクジ1 好士カウジ1 富士丸フジ^口3
 先師センシ2 盛者シヤウジャー 唐書タウシヨ1 衆生シニシヤウ2
 大官官合タイシヤウエ1 領掌レウシヤウ1 勸請フンシヤウ1
 王舍城ワウシヤウ2 起居動靜キキョトシヨウ1 始終シシウ1
 肝心カンシン2 淺深センシン3 應神天皇ヤウジン^口4 船石ハシシヤウ1
 甚深チン2 充滿チウマン1 叙爵キョウシヤウ1 貪嗔痴トシシヤウ1

。「チ」による表記の期待されるもの
 地ヂ2 治ヂ2 持ヂ2 直ヂチ4 軸ヂク3 笠ヂク2
 女ヂヨ1 住ヂウ1 塵ヂン10 増長ゾウチヤウ2 落着ラクヂヤウ7
 持ジ1 女シヨ1 除シヨ1 杼シヨ1 重シウ1 住ジウ15
 着シヤク1
 。「ス」による表記の期待されるもの
 瑞ズイ2 隨ズイ2
 。「ツ」による表記の期待されるもの
 途ツ2 圖ツ2

④和語の場合

。「ジ」による表記の期待されるもの
 始ハジク12 聖ヒジリ2 交マハハリ8 雉チシイ
 味アチ3 楊シチ1 閉トヂチ1 恥ハチ1 蕪アチバカマ1

高藤タカフヂ2 淺茅アサチ1 別路ワカレヂ1
 。「ス」による表記の期待されるもの
 數カズ2 葛クズ2 常澄ツチズミ1 春澄ハルズミ1
 。「ツ」による表記の期待されるもの
 關アツカリ1 梓アツサ1 東遊アツマツビ1 埋ウツミ1 葛ウチ1
 蛙カハツ2 嚮サヘツリ1 靜子シツクイヨ2 尋クツズウ 續ツツキ1
 閉トツ1 先マツ1 水ミツ2 万雄ヨロツチ1 纒フツカニ1
 難波津ナニハツ1
 これを整理して示せば、次のようになる。

※漢語の場合

。「ジ」の期待されるもの
 「ジ」 157 (96.9%)
 「チ」 5 (3.1%)

。「ス」の期待されるもの
 「ス」 21 (36.2%)
 「ズ」 36 (63.2%)

※和語の場合

。「ジ」の期待されるもの
 「ジ」 23 (88.5%)
 「チ」 3 (11.5%)

。「ス」の期待されるもの
 「ス」 6
 「ズ」 0

。「ツ」の期待されるもの
 「ツ」 26

漢語の場合、「ガ」による表記の期待されるものについて、聊か混乱が目につくものの、全般に四つ仮名の使い分けが良く保たれており、その背後に、かなり明確な音韻論的区別が存在したのではなからうと思わせる。

——中央語におけるへ四つ仮名Vの区別がいつ失われたものか、明確ではないが、従来説かれる如く、中世末から近世初期にかけて次第に失われつつ行ったものとするれば、右の事実は、結果的に、九大本¹⁰秘抄¹¹の書写時期がそれ以後に下らぬことを物語るものと思われ、注目される。

7. 清濁の注記について

九大本¹⁰秘抄¹¹本文に見える清濁注記については、その大要を「前述の拙稿¹²「文献探究」」5所収¹³に示しておいたので、参照して頂ければ幸いである。

そこには、例えば、「¹⁴。」「¹⁵。」「¹⁶。」「¹⁷。」「¹⁸。」「¹⁹。」「²⁰。」「²¹。」「²²。」「²³。」「²⁴。」「²⁵。」「²⁶。」「²⁷。」「²⁸。」「²⁹。」「³⁰。」「³¹。」「³²。」「³³。」「³⁴。」「³⁵。」「³⁶。」「³⁷。」「³⁸。」「³⁹。」「⁴⁰。」「⁴¹。」「⁴²。」「⁴³。」「⁴⁴。」「⁴⁵。」「⁴⁶。」「⁴⁷。」「⁴⁸。」「⁴⁹。」「⁵⁰。」「⁵¹。」「⁵²。」「⁵³。」「⁵⁴。」「⁵⁵。」「⁵⁶。」「⁵⁷。」「⁵⁸。」「⁵⁹。」「⁶⁰。」「⁶¹。」「⁶²。」「⁶³。」「⁶⁴。」「⁶⁵。」「⁶⁶。」「⁶⁷。」「⁶⁸。」「⁶⁹。」「⁷⁰。」「⁷¹。」「⁷²。」「⁷³。」「⁷⁴。」「⁷⁵。」「⁷⁶。」「⁷⁷。」「⁷⁸。」「⁷⁹。」「⁸⁰。」「⁸¹。」「⁸²。」「⁸³。」「⁸⁴。」「⁸⁵。」「⁸⁶。」「⁸⁷。」「⁸⁸。」「⁸⁹。」「⁹⁰。」「⁹¹。」「⁹²。」「⁹³。」「⁹⁴。」「⁹⁵。」「⁹⁶。」「⁹⁷。」「⁹⁸。」「⁹⁹。」「¹⁰⁰。」の如き濁点¹⁴。「。」の如きへ不濁点¹⁵が認められ、甚だ興味深い。用例のいくつかを示せば、次の通りである。

「御師説 ばかハとにころ時ハ下ノハ、捨^{スツ}て見へし」(18/92)「いかならんいはほの中にすまはかほ……」の注
「御師説 はてのかもしにころ也かなのせ」(8/26)「思ふとち春のムへにうちむれてそこともいはぬ旅ねしてしか」の注

「御師説 しもついでも手」(17/90)詞書「しもついでもて」の注

「御師説 心かへ物にもかハ哉也かをすむ説いか、我トムト。心かへせかたおもひなれハくるしきとせ」(17/90)「心かへする物にまか……」の注

「御師説 われそかすかくハ われかかき……」の注
「(15/91) あかつきの鳴りはなかき」の注

「いつしかとまたく心を またく心ハ 待心也、跨ぐる心をよそ、てよめり 脛にかきあけてさしまたけて木たんとせ」(17/90)の注

「御師説 わたつうみ」(17/90)「わたつうみのおきこしほよひに」の注

「御師説 綾綺殿 大内裏ニアル御殿也」(8/55)「おなりえをまき」の注
「御抄云 …… 今世後世共ニ身上をはかる哥也」(カミシ)と云……」(17/90)「風のうへにありかたためぬ……」の注

「。」は、本文の漢字・仮名、傍訓の片仮名の区別なく用いられているが、「。」は、各々、本文の仮名、本文の仮名、本文の仮名・傍訓の片仮名に用いられているばかりである。一見、その用法に違いがあるようにも思われるのであるが、これは、後者の用例数が少ないために、たまたまその他の例が見当たらないものようである。本来そのような用法上の相違が有ったとは、考えられない。

また、同じく濁音であることを注記するのに、何故このような多種の符号が必要とされたのか問題であるが、この場合、各符号間に、「 \circ 」 \downarrow 「 ω 」 \downarrow 「 ω 」 \downarrow 「 ω 」 \downarrow 「 ω 」 \downarrow 「 ω 」の如き系諸関係がたゞれをうなことから見て、それらが一時期に用いられたものではなく、長年に亘る伝受の過程で生み出され、受け継がれてきたものとするのが適当なようである（この点、清濁注記は、前述し、7.の各傍訓注記とは聊か性格を異にするものようである）。

8. その他

以上、九州大学所蔵『延五秘抄』一本の傍訓注記を取り上げ、その表記の実態を明らかにするとともに、それが反映する事実について考察して来たわけであるが、既に紙数も尽きた。

このほか、本文の仮名書き部分・傍訓注記のそれぞれについて、興味深い語彙・語形・文法的現象が多く認められるのであるが、全て次回にゆずりたいと思う。

今回の考察によつて、同本書字の表記に関する認識をいく分なりとも明らかにすることができたならば、幸いである。諸賢の御批正を賜わりたく思う。

注1 あえて「表記」の混乱としたのは、本稿において直接に考察の対象とし得るものが、音韻そのものでなく表記であるため、その背後に音韻の混乱があったことを否定するものではない。念のため、申し添えておきたいと思う。

注2 九州大学蔵本のほか、内閣文庫所蔵の二本が知られている。

詳しくは、「文献探究」3所載の拙稿を参照されたい。

注3 両書とも、東常縁 \downarrow 宗祇 \downarrow 牡丹花岸柏 \downarrow 近衛尚通と連なる中世古今伝受の一流において生み出されたものであり、『延五秘抄』の纏められるものとなったものである。これについても、詳しくは、「文献探究」3の拙稿を参照されたい。

なお、これら諸書における注記の実態等については、別の機会に触れることとしたい。

注4 表中、漢字は、開合表記に関わる傍訓の付された文字、その下の片仮名は、傍訓の表記形態、数字はその出現回数、を示す（片仮名のうち、傍線を付したものは、本来の表記形と異なるものである）。

以下、表の見方は、これに準じて推知されたい。なお、表記例の集計・整理を行なう場合は、全て延べ字数に依つてい

注5 ひとまず、違例なしと見て差しつかえないものと思われるが、なお、本文仮名書き部分の実態等、比較検討して見る必要がありやうである（これは、他の諸事項についても認められることであるが、今回は紙幅の関係上全く触れることができなかった。次回にこれを取り上げたいと思う）。

注6 これについては、亀井孝「オ段の（長音）の開合」の混乱をめぐる「報告」（『国語国文』31の6）等、参照。

注7 そうした音韻変化の存在そのものは、他の資料によって裏付

けられるところである。

常識的に見ても、「ユウ」の表記によって [iu] を想起することは甚だ困難なはずであるから、これは、素直に、拗長音化の事実を反映するものと見るべきであろう。

注8 他の資料によって、中世末までには、u 連母音がほとんど拗長音化していたと見られる事実、および、ここで、u 連母音の表記のあり方と拗長音の表記のあり方との間に何ら差違が認められないこと、の二点による。

注9 キリシタン資料の表記法等を参照すれば、⁽¹⁾ の如く意識されていた可能性も少なくないであろうに思われる（但し、種々考察の余地有り）。

注10 「オ・ウ段拗長音表記の動搖」(「国語国文」44の3)参照。

注11 傍訓の表記形態を示す場合、「カクハフ・クハヘテ・クハヘシ」の如く多岐に亘るものについては、便宜、その中の一つを選んで代表させた。

注12 九大本「秘抄」の書写者が、仮名遣いについてどのような認識を持っていたか、甚だ興味有るところであるが、今回調査したかぎりでは不明の点が少なくない。「を」「お」の用い方などには、いわゆる定家仮名遣いの影響を受けていることも考えられるのであるが、なお、本文仮名書き部分の表記等を比較検討してみる必要が有りそうである。

注13 注11参照。